

矢嶋城跡

—第2曲輪部の建築遺構—

1988

浅科村教育委員会



第2曲輪部全景

序

矢嶋城跡の発掘調査事業は、1984年に自然崩落・破壊等の進行から緊急発掘調査(第1次発掘調査)を、1986年には矢嶋城跡腰曲輪部に開鑿した用水路の調査(五郎兵衛用水)として第2次調査を実施し、城跡の解明に向け地域の皆様と共に、この事業に取り組んでまいりました。今回の調査は、1次、2次調査の成果を踏まえて、城跡の構造や機能面を明らかにするために計画しました。

第1次の矢嶋城跡緊急発掘調査において、第2曲輪内に、方形の柱穴及び溝等の遺構を多数検出することができましたが、この時は、一部分の遺構検出であり、全容解明への手がかりにすることはできませんでした。

しかし、第2曲輪部に建築物の存在を確認することができたことにより、城跡全容解明への期待をもつことができました。

そこで、今回第3次調査として、第2曲輪部(総面積1,400m²)の全面発掘調査を行い、中世山城跡の全容解明に向けての調査事業をスタートさせました。

特に、建築遺構の確認に焦点をあて、建築物を推測するための資料と学習教材化を図ることを目的として調査を進めました。

その結果、295という膨大な数の建築遺構(柱穴)を発見することができました。これを基に、現在建築物の規模・構造等について検討する段階に入り、推定作業を進行させているところです。建築遺構の発見は、今後の矢嶋城跡の全容解明を進める上で、当時の城の持つ機能や規模を推測する上において非常に貴重な資料を得ることができたと考えております。

今後の調査課題は、主郭部の全面発掘(第4次、第5次調査)、空堀部(第6次)、城跡の南部(第7次、第8次...)調査の計画であり、5年以上を要す調査に対する調査体制の確立と調査費用の確保をどう行うかであります。壊れつつある貴重な文化遺産を記録保存すると共に、調査成果の活用に向け、関係する皆様方のご指導とお力添えを賜りながら一層努力して参る所存であります。今後ともよろしくお願ひいたします。

本調査並びに報告書作成にあたり、國學院大學の上代純一調査主任をはじめ、同大學の歴史考古学全員の皆様には長期にわたりご協力をいただきました。衷心より敬意と感謝の意を表する次第であります。

また、調査にご理解願い、調査地を提供していただきました地権者の皆様や調査を何かと支えていただきました地域住民の皆様に大変感謝申し上げます。

本調査の成果を多くの皆様にご利用いただき、貴重な文化財としての理解を高めると共に郷土を再認識し、更に新しい文化を創造する礎になれば幸いであります。

浅科村教育委員会

1988年3月

教育長 橋場安國

例　　言

1. 本書は、昭和62年7月19日～9月6日まで発掘調査を実施した、矢鳴城跡の学術調査報告書である。
2. 本調査は、建築遺構を追求し、建築物を推定するための学術調査とし、浅科村教育委員会が組織した発掘調査団により実施した。
3. 遺構の実測、遺物の整理（洗浄・注記）は、國學院大學歴史考古学会が行った。
4. 本書の図版の作成は、國學院大學歴史考古学会が行った。
5. 本書の執筆は、上代純一、小宮山克己、岡田裕並びに調査事務局で行った。
6. 遺構、遺物の写真は、北原郁生が撮影した。
7. 発掘調査に係る諸記録、図面及び資料等は、浅科村教育委員会が保管している。
8. 本書の編集業務は、浅科村教育委員会が行った。

本　文　目　次

序

例　　言

第1章 発掘調査の経過	1
第1節 発掘調査に至る経過	1
第2節 調査の構成	1
第3節 調査団組織	2
第4節 調査日誌	2
第2章 造　構	4
第1節 堀立建物遺構	4
第2節 第1竪穴遺構	11
第3節 第2竪穴遺構	11
第4節 溝状遺構	11
第3章 遺　物	16
1 土師質土器	16
2 青磁碗	16
3 常滑窯系陶器	16
4 石　白	16
第4章 総　括	18

挿 図 目 次

第1図 矢嶋城跡平面図	5
第2図 グリッド配置図及び遺構概要図	9
第3図 基本土層図	10
第4図 握立建物遺構	12
第5図 第1竪穴遺構	13
第6図 第2竪穴遺構	14
第7図 溝状遺構	15
第8図 遺 物	17
第9図 大井城跡（黒岩城跡）Ta1号竪穴遺構	18
第10図 大井城跡（黒岩城跡）Ta39号竪穴遺構	19
第11図 第2竪穴遺構出土	19

図 版 目 次

図版 1 調査前・調査風景・安全祈願祭・埋めもどし前	
図版 2 第5図 第1竪穴遺構・第4図 第2竪穴遺構	
図版 3 柱穴及び第1（奥）第2（手前）竪穴遺構・柱穴検出状況	
図版 4 第1竪穴遺構・A-4グリッド断面・東西方向に構築された溝	
図版 5 第2竪穴遺構・第2竪穴遺構内の鑿使用痕	
図版 6 内耳土器出土状況（第2竪穴遺構内）・柱穴内の鑿使用痕	
図版 7 柱穴（重複状況）・甕・常滑片（8図-7）・青磁碗（8図-6）	
図版 8 杯・磨製石斧（第11図）	
図版 9 内耳土器（8図-4）・内耳土器破片（8図-5）・ひき白（8図-9）・つき白（8図-10）	

第1章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至る経過

今回の調査は、第3次矢嶋城跡発掘調査として、建築遺構を追求するために行った学術調査である。

1984年の第1次矢嶋城跡発掘調査において、第2曲輪部（腰曲輪）に設定した2本のトレントチから多数の建築遺構（方形の柱穴）が検出され、建築物の存在に期待がもたれた。

そこで第3次調査として、第2曲輪部北部の発掘を行い、中世山城の建築物の規模や城跡の全容の解明を進めるために調査を実施した。

國學院大學の歴史考古学会のメンバーを中心に発掘調査団を結成し、7月19日から調査を開始した。

第2節 調査の構成

- | | |
|---------|--|
| 1) 遺跡名 | 矢嶋城跡 |
| 2) 所在地 | 長野県北佐久郡浅科村大字矢島字城平624番、625-1番 |
| 3) 調査原因 | 1984年の第1次矢嶋城跡発掘調査において、柱穴等の建築遺構を検出することができた。この建築遺構を追究し、当時の建築物を推測するための学術調査とし、発掘調査を実施し記録保存を図る。 |
| 4) 調査主体 | 浅科村教育委員会及び発掘調査団 |
| 5) 調査期間 | 現場発掘調査 昭和62年7月19日～9月10日
作図等整理作業 昭和62年9月11日～2月20日 |
| 6) 調査面積 | 1,400m ² |
| 7) 調査方法 | 第2曲輪部の東一西をA～G、南一北を1～9とする4m×4mのグリッド方式による平面発掘。発掘調査の表土剥ぎはバックホーを主体に行った。 |

第3節 調査団組織

調査団長 橋場 安國 (浅科村教育委員会 教育長)
調査主任 上代 純一 (國學院大學 歴史考古学会部長)
調査員 木村 英俊 (國學院大學 歴史考古学会長)
調査補助員 國學院大學歴史考古学会: 浅香 範重・岡田 裕・小山 浩美
高橋 時恵・山内 敏治・森 一也・瀬戸口真人・磯田 信子
調査協力者 高林 重水 (岡谷市職員)
國學院大學職員: 古山 悟由・平井 弘子・松井 敦子
岡田 純・岡田 良 (望月町)
金井 靖 (金井重機代表)
調査事務 浅科村教育委員会: 小平 勝幸・竹内不二夫・高野庄次郎
松田 健一・小林智恵子・町田 文江・北原 郁生

第4節 調査日誌

- 7月19日 (日) 雨 グリッド設定準備。
- 20日 (月) 曇 安全祈願祭。テント設営。草刈り。1次調査の基準杭確認のうえ、南北34m、東西26mの範囲に2m四方のグリッドを設定。総グリッド数63個である。
- 21日 (火) 晴 グリッド設定のための杭打ち。A区 (E-1)(F-1) グリッド (以下G) 着手。尚、表土剥ぎの際重機にて行った。
- 22日 (水) 晴一時雨
- 23日 (木) 晴 (A-4、9) (D~F-1) G着手。
- 24日 (金) 晴 (D~F-2、4) G着手。 (A-9) Gセクション訂正。
- 25日 (土) 晴／雨 (D~F-3) (D-6) (E-6) (F-4、6) G着手。
- 26日 (日) 晴 (B-6、8) (D-8) G着手。
- 27日 (月) 晴／曇 (C-1、2) (D~F-5) G着手。
- 28日 (火) 曇／晴 前日迄の作業続行。
- 29日 (水) 晴
- 30日 (木) 曇／晴 基準杭レベル計測。(B-3) (C-3、4) G着手。 (A-9) G北壁土層図。S=1:40 (以下同) とした。
- 31日 (金) 曇／晴 (A-9) 東壁土層図、(A-5、6、7、8) 東壁断面図、(A-5、

- 6、7) 北壁断面図を作製。(D-7) G拡張。信濃毎日新聞取材。
- 8月3日(月) 晴 (C-5) G着手。
- 4日(火) 晴／曇 (B-4、5) G着手。調査区西側より竪穴遺構Iを確認。覆土より炭・焼土・磨製石斧 土鍋片検出。
- 5日(水) 曇／雨 竪穴遺構I範囲確認のため西側に2m拡張。(B-6) G着手。(A-4) G北壁・東壁の土層図を作製。
- 6日(木) 曇 (F-3) G焼土部裁断。このFに溝検出。
- 7日(金) 曇 (F-3) 溝部範囲確認。(F-4、5) G南北ライン土層図をとる。
- 8日(土) 晴 竪穴遺構I(F-5側)東西断面図(1:20)で作製。(F-3) G焼土部裁断。溝の範囲確認。
- 9日(日) 晴／雨 竪穴遺構Iセクションベルトの土層図及び断面図を作製。(F-3) G焼土部南北ラインの東から見た土層図を作製。
- 10日(月) 晴／雨 (F-4・5) 土層図。
- 11日(火) 晴 (F-3) 焼土部東西ライン土層図を作製。杭の位置。レベル確認。
- 12日(水) 晴 (F-1)(F-2と3の間)(F-3と4の間)の西の杭を打ち直し。F区の西壁断面図を3グリッド分とる。(F-3) Gの焼土部のみ土層図をとる。(F-3) G西側2m、(F-7) G拡張。
- 13日(木) 晴／雨 (C-1、2) Gのレベリング、前日迄の測量続行。(F-1、2) Gの平面図をとる。(E-7) 拡張区確認面精査。6区断面図。(E-6) グリッド拡張。第1竪穴遺構確認。
- 14日(金) 晴 5区北壁断面図を作製。
- 16日(日) 晴 3区南壁、北壁、6区南壁ベルト断面図、(D-3) G平面図を作製。
- 17日(月) 晴 1区西壁、E区南壁断面図、(C-3、4)(D-4) G平面図を作製。
- 18日(火) 晴／雨 D区西壁断面図を作製。(D-2、3) Gの溝部平面図。
- 19日(水) 晴／雨 C区西壁断面図を作製。(C・D-5) G平面図。
- 20日(木) 晴／雨 B区西壁断面図を作製。C・D区平面図。
- 21日(金) 晴 第1竪穴遺構平面図。C区付近溝部平面図。
- 22日(土) 雨／曇 (F-4、5) の平面図の測量。(E-6) G平面図。
- 23日(日) 雨／曇 (E-6) Gの平面図、レベリング。
- 24日(月) 晴 (E-6) G正中切開。(D-6) Gの平面図、レベリング。
- 25日(火) 曇／雨 (C-6) Gの平面図、レベリング。
- 26日(水) 晴 (B-5) Gの溝部の土層図を作製。
- 27日(木) 晴 南北へ向かうセクションベルト9本を取り去る。第1竪穴遺構の写真撮影。

28日（金）	晴	東西方向のベルトを取り除く。
29日（土）	晴	1・2区精査。
30日（日）	晴	前日迄の作業続行。
31日（月）	晴	（F-6）G第2竪穴遺構確認、掘り下げ。
9月1日（火）	曇	調査区全体写真撮影。
2日（水）	曇／雨	（C-5）G精査。
3日（木）	曇	（F-7・8）G西壁土層図。第2竪穴遺構西壁断面図修正。
6日（日）	晴	現場調査終了。

第2章 遺構

発掘調査は、矢鳴城跡第2曲輪、主郭北側の一段下がった部分において行った。調査範囲を南北34m、東西26mに設定し、4m四方の区画（グリッド）に区切った（第1・2・3図）。第一次調査の際に使用したA・B・C杭の作る線分と、直交するB・D杭の為す線分を基準にし、南から1・2…9と数字をふり全9区、東から順にA・B…Gとアルファベットを用いた全7区とした。

調査区内の耕作土は浅かったが、茅・桑の根が張っていたため、表土剥ぎは抜根を中心となった。表土から遺構確認面までの深さは、平均して約20乃至30cm程であり、北に向かって緩かな傾斜を持つ。この曲輪内では、東側ではB区以東、北側では6区以北で客土がされていた。A-4・A-9グリッドにて基本土層の確認を行ったが、明らかに人为的に盛られたものであった。

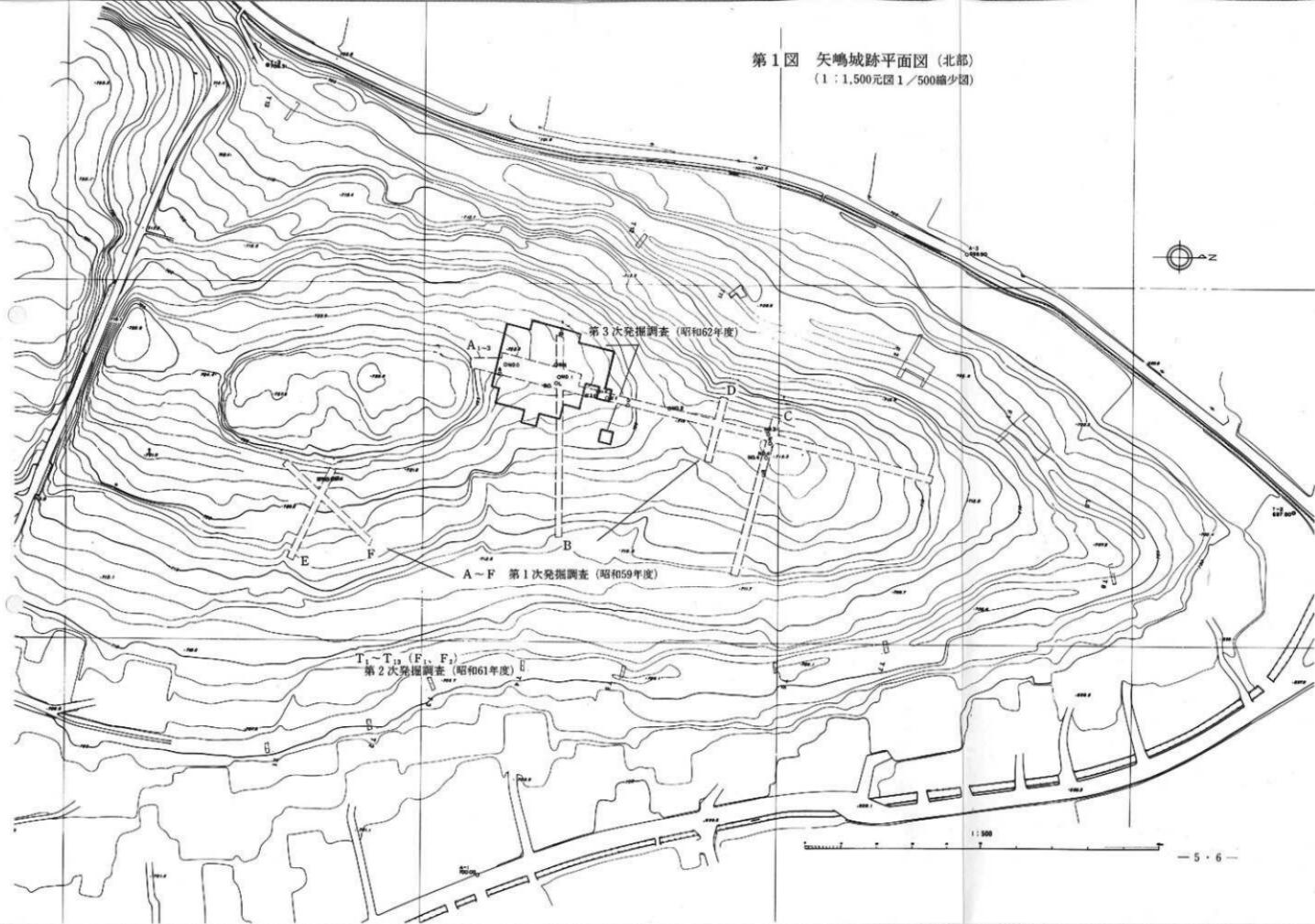
検出された柱穴は遺構確認面、即ち地山である岩盤を掘り込む形で存在し、計295個を数えた。また、遺構としては竪穴遺構が2基、掘立建物が1棟、そして溝状の遺構が10本であった。溝の性格は不明である。出土遺物は全体的に少なかった。

また水系レベルは、基準杭A点との高低差であり、単位はcmである。

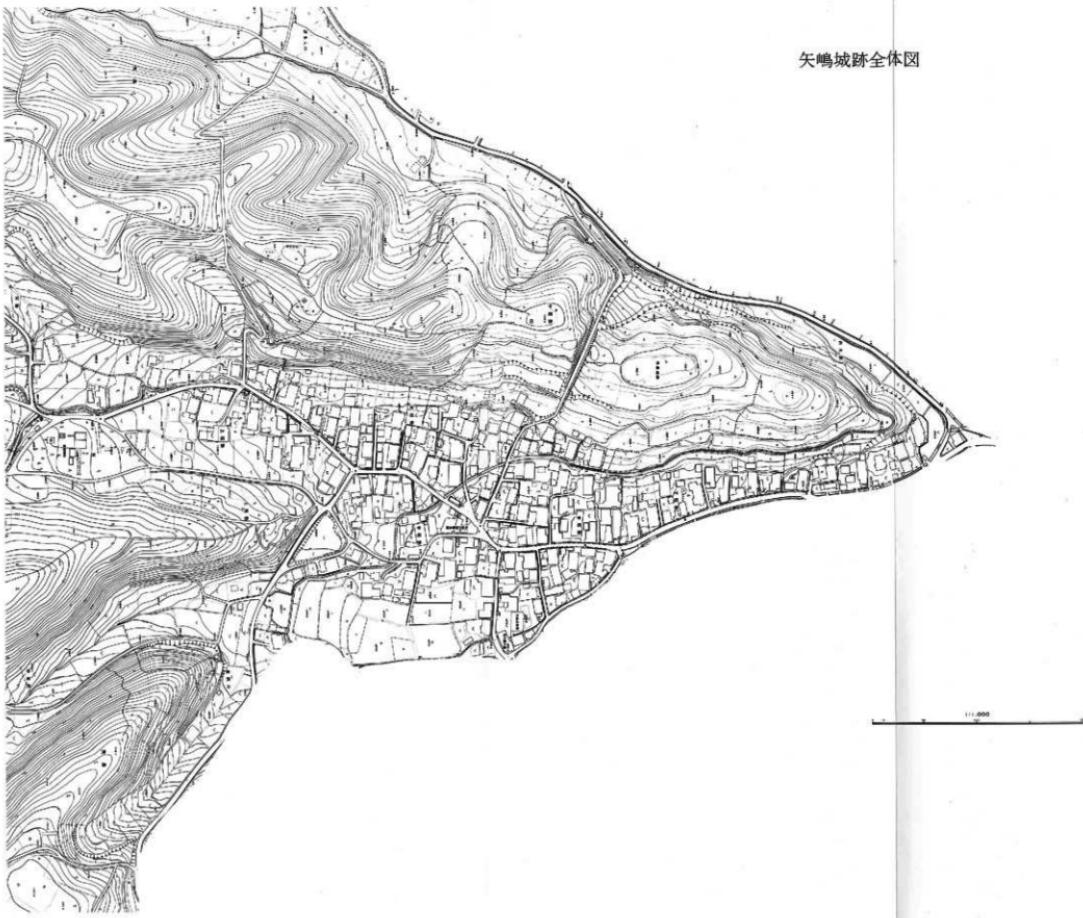
第1節 掘立建物遺構（第4図）

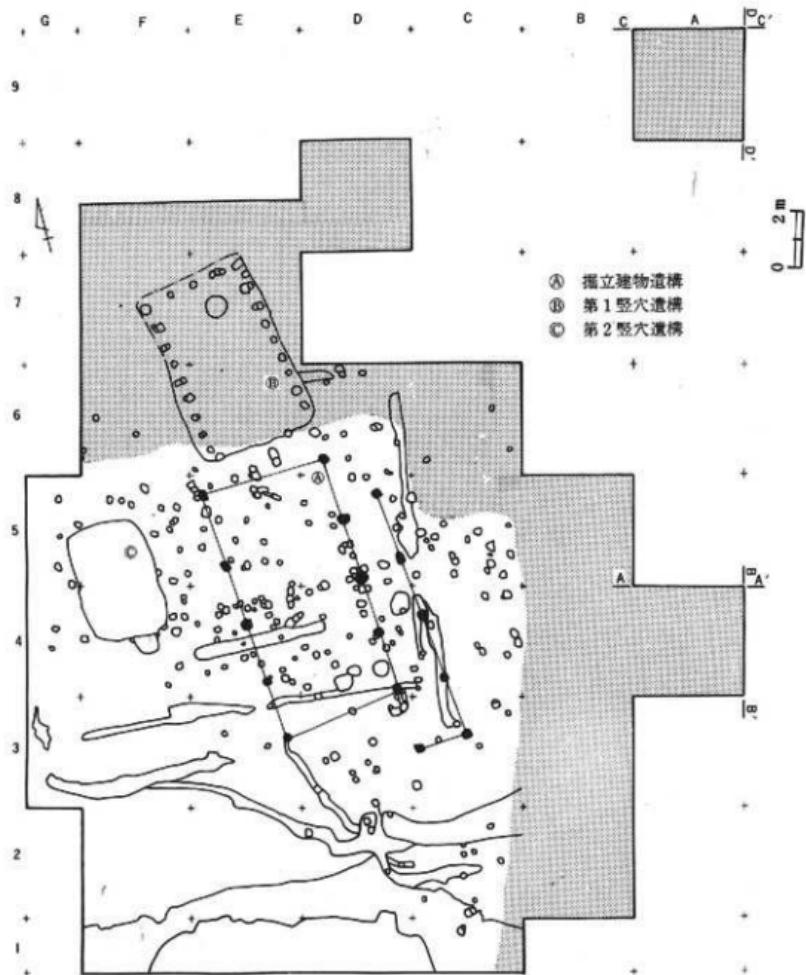
調査区内のはば中央、C-3・C-4・C-5・D-3・D-4・D-5・D-6・E-3・E-4・E-5グリッドの範囲にある。主軸方向はN-10°-W。長方形であり、南北4軒あるいは5軒、東西1軒あるいは2軒の掘立柱痕が残る。確認面（岩盤）は比較的平坦であり、わずかに北側・東側に傾斜する。小規模であれば長辺約6.5m、短辺約3.2mである。大規模とみると、各7.8m、4.3mとなるが、北東部、南西部で柱穴を確認できなかつたためこの部分の性格は不明である。また、柱穴底部はほぼ同レベルとなっている。柱穴覆土は黒色土のみであり、柱痕や遺物は検出されなかった。溝遺構1・2・4・6と重複する。

第1図 矢嶋城跡平面図(北部)
(1:1,500元図1/500縮少図)



矢鳴城跡全体図

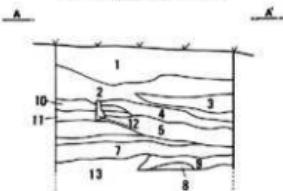




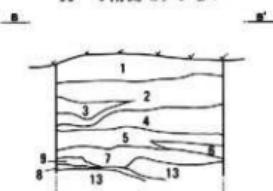
○……表示の部分は岩盤構造面と水平レベルでの埋め立て部分である。

第2図 グリッド配置図及び造構概要図 (網部分は切り盛り部)

A-4 北側セクション



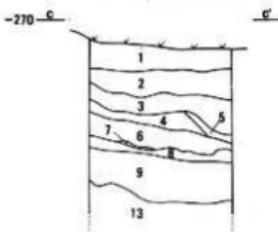
A-4 南側セクション



A-4 グリッド土層説明

- 1 混乱
- 2 黄褐色土層 $\phi 3 \sim 5\text{mm}$ の小石、軽石混在。
- 3 濃茶褐色土層
- 4 茶褐色土層 黄褐色土粒子を含む。
- 5 暗赤褐色土層 黄褐色土粒子を多量に含む。
- 6 黄褐色砂層
- 7 暗灰色砂層 粘質の高い土が混在。
- 8 淡赤褐色土層 固くしまる。
- 9 黄褐色土層 $\phi 5 \sim 50\text{mm}$ の黄褐色土粒子を多量に含む。
- 10 暗褐色土層 黄褐色土粒子を多く含む。
- 11 黒色土層 もろい。
- 12 赤褐色土 基質。
- 13 岩盤

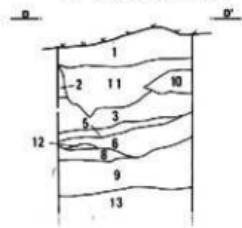
A-9 北側セクション



A-9 グリッド土層説明

- 1 混乱
- 2 黒色土層 樹による擾乱が入る。軟質。
- 3 茶褐色土層 炭化物、 $\phi 1 \sim 5\text{mm}$ の小石を含む。
- 4 茶褐色土層 バニス・ $\phi 4\text{mm}$ 程の小石を少し含む。
- 5 黒色土層 固くしまる。
- 6 濃茶褐色土層 バニスを多量に含む。
- 7 黄褐色砂層 砂質。
- 8 黑色土層 ベルト状の砂質土。黄褐色の砂を多く含み、泥土を僅かに含む。
- 9 暗赤褐色砂層 炭化物、泥土、バニス混在。粘性高。
- 10 岩 切り盛り用と思われる。
- 11 黄褐色土層 $\phi 1\text{cm} \sim$ 拳大の小砾を含む。
- 12 茶褐色土層
- 13 岩盤

A-9 東側セクション



(A-4) (A-9) の土層は、共に自然堆積でなく、人为的に盛られていることがわかる。地山は (A-9) 区で表土より 2 m の深さとなり中心より東側に傾斜していることが確認された。

第3図 基本土層図

第2節 第1竪穴遺構（第5図）

D-6・E-6・E-7・F-6・F-7グリッドより検出された。主軸N-20°-W。長辺約6.8m、短辺約4.5mの隅丸長方形を呈す。南側の一部を除いて、切り盛りの部分であり、壁面も北側は確認できず、柱穴の検出により北辺を推定した。また柱穴は長軸方向に東西各9個であり、間隔は各々35~45cm程度である。短軸方向は北辺5個、間隔は約50~70cm。南辺は壁面上に2個あり、南側が出口になっていたと思われる。また柱穴は同一箇所に2個または3個と重複しているものも多かった。

遺物は覆土より土鍋片、かわらけ、床面上には河原石（丸く偏平である）が6点確認された。

第3節 第2竪穴遺構（第6図）

F-4・F-5・F-6グリッドにまたがって検出された。主軸N-15°-W。形状は、長辺約4.3m、段差を含めると5mを測り、短辺が2.8mの隅丸長方形である。南側短辺東寄りに階段状に一段設けられているこの段の両脇に、小さな柱穴が検出され、この部分が遺構における出入口となっていたと思われる。No244・245以外の周囲をとりまく柱穴の関係は不明である。遺構内に柱穴は検出されなかった。壁面は整あるいはクワのような道具を用いて掘られたと思われる形跡が残っていた。

遺物は、遺構内覆土よりかわらけの灯明皿、土鍋片、磨製石斧が出土し、同様なレベルから炭化物も少量だが検出されている。

第4節 溝状遺構（第7図）

溝状の遺構は10本を数えるが、その性格については現時点では不明である。

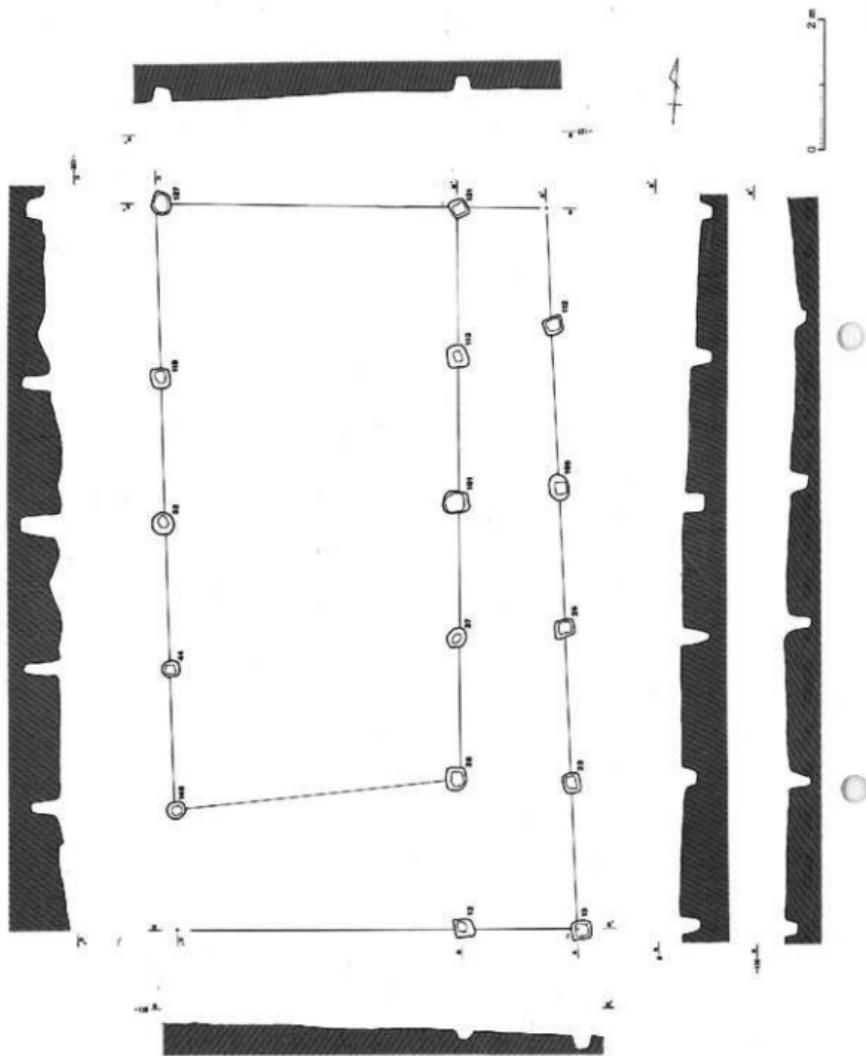
SD1 C-3・C-4グリッド検出。主軸方向N-16°-E。長さ4.8m、幅35~45cm。SD2と切り合う。

SD2 C-4グリッド。N-18°-E。長さ2.3m、幅20cm。北側は擾乱を受けている。

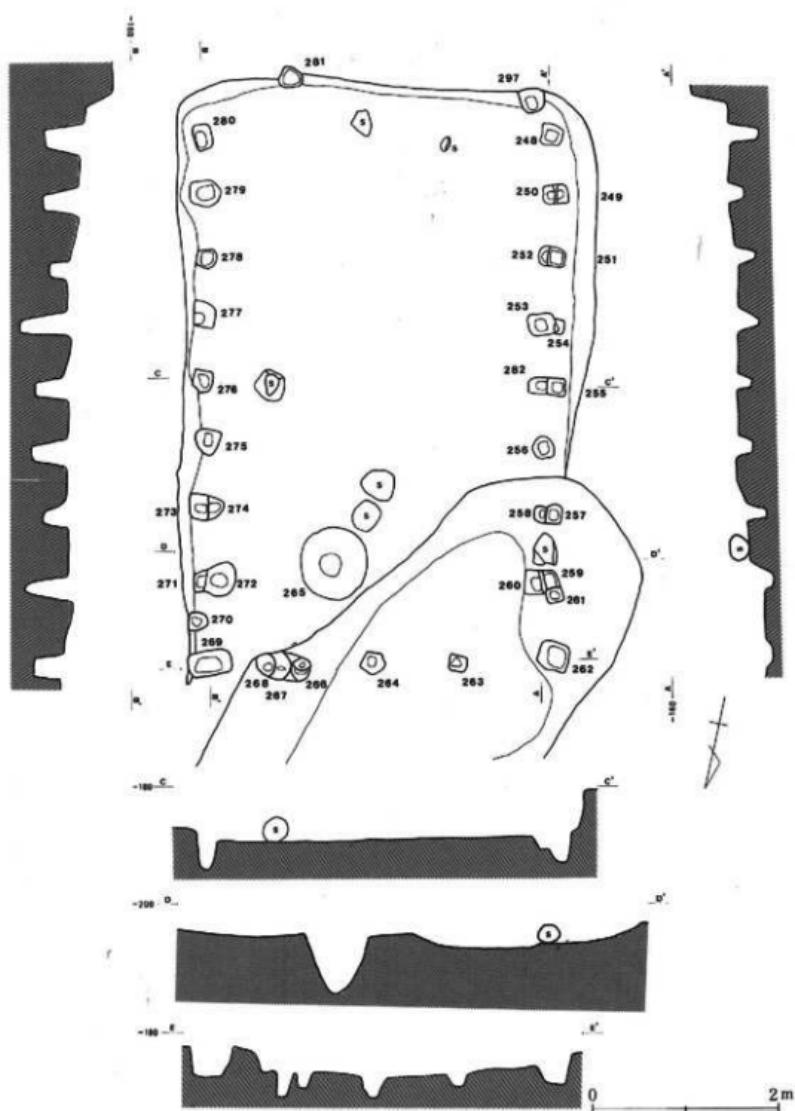
SD3 C-5・D-5・D-6グリッド。N-19°-E。長さ6.1m、幅25~40cm。北端は切り盛り部であり未確認である。

SD4 C-4・D-3・D-4・E-3グリッド。N-87°-W。長さ5.2m、幅25cm。東側大半が擾乱のため検出できなかった。

SD5 E-3・F-3グリッド。N-87°30'-W。長さ6.3m、幅25cm。東側が擾乱を受けている。



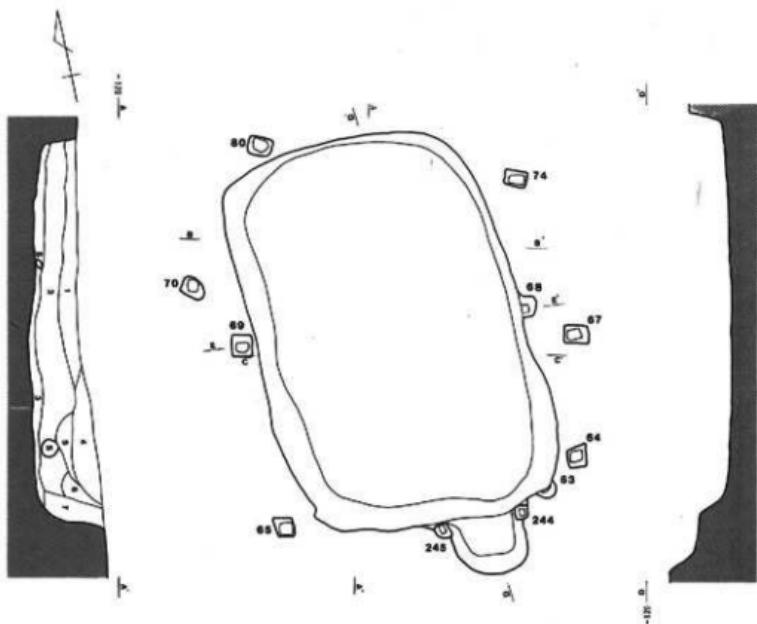
第4図 堀立建物遺構



第5図 第1竖穴遺構

S D 6 D-4・E-4 グリッド。N-89°Wと、ほぼ磁北に直交する。長さ4.8m、幅50cm。

全体的に地山は浅く掘られており、遺物は検出されなかった。

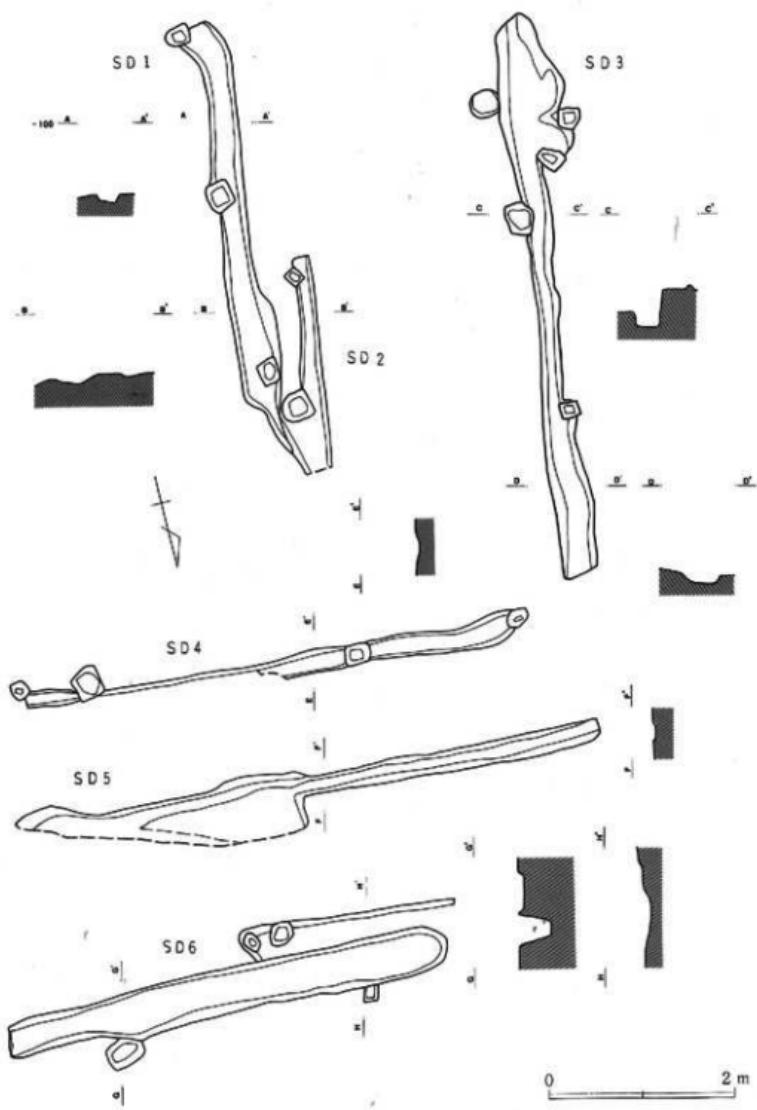


第2堅穴遺構土層説明

- 1 茶褐色土層 深5~30mmの黄色・淡赤褐色土粒子を多量に含む。
- 2 茶褐色土層 1より濃い。φ20~50mmの黒色粘土・黄色土粒子を多く含む。
- 3 濃茶褐色土層 砂・砂利混在。
- 4 暗褐色土層 炭化物・焼土を多く含む。
- 5 暗褐色土層 炭化物を多少含む。焼土は微量。
- 6 茶褐色土層 岩盤粒子を多く含む。
- 7 茶褐色土層 岩・季大の石が多量に混在。



第6図 第2堅穴遺構



第7図 溝状遺構

第3章 遺物 (第8図1~10)

1 土師質土器

(1) かわらけ (第8図1~3)

1は口径8.2cm、器高2.1cm、底径6.4cmを測る完形資料である。右回転のロクロ成形で、体部は直線的に立ち上がり、外面にロクロ目を顯著に残す。底部は回転糸切による切離しで、底部内面中央に突起を有する。胎土に透明・白色・赤色・黒色板状粒子を含み、色調は黄褐色を呈する。口唇部に油煙の付着が認められる。第2竪穴遺構出土。2は推定口径11.4cm、器高2.5cm、底径8.6cmを測る。ロクロ成形で、体部に棱を有する。黄褐色を呈し、胎土に透明・白色・赤色・黒色粒子を含む。口唇部に油煙の付着が認められる。E-5区出土。3は底部破片で、底部は回転糸切による切離しである。底径6.4cmを測り、右回転のロクロ成形である。胎土に透明・白色・赤色・黒色粒子を含み、暗赤褐色を呈する。

(2) 土鍋 (第8図4・5)

4、5はともに口縁部の破片であり、内面に環状の把手を有する内耳土鍋である。胴部は桶状に直立し、頸部内面に棱を有し、口縁が内湾気味に立ち上がる形態のもので、粘土紐輪横成形、口縁部はヨコナデ調整が施される。環状把手貼付後、接合部周辺に指ナデ調整が施される。4は胎土に透明・白色・赤色・黒色板状粒子を含み、黄褐色を呈する。第1竪穴遺構出土。5は胎土に透明・白色・赤色粒子を含み、外面暗褐色、胎芯黄褐色、内面赤褐色を呈する。F-6区出土。

2 青磁碗 (第8図6)

高台付碗の底部破片で、高台径5.6cmを測る。外面に蓮弁文の線刻が垂下している。底裏は右回転の回転ヘラケズリが施されている。釉は淡緑色を呈し、胎土に透明・白色微粒子を含む。C-4区出土。

3 常滑窯系陶器 (第8図7、8)

(1) 捏鉢 (第8図7)

推定底径17.2cmを測る。ヨリコづくりで、底部は砂底である。体部は、ほぼ直線的に立ち上がり、外面は縱方向のヘラナデが施される。暗赤褐色を呈し、胎土に透明・白色・黒色粒子、白色小石を含む。D-2区出土。

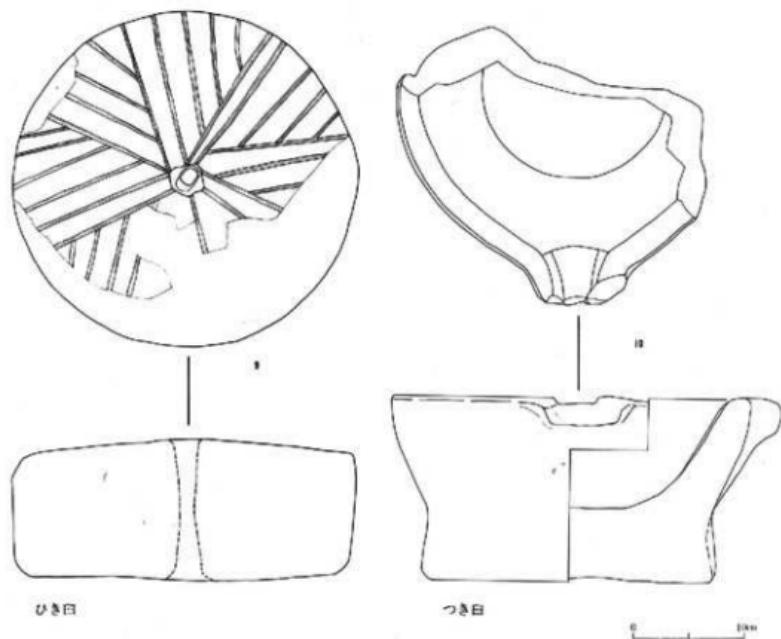
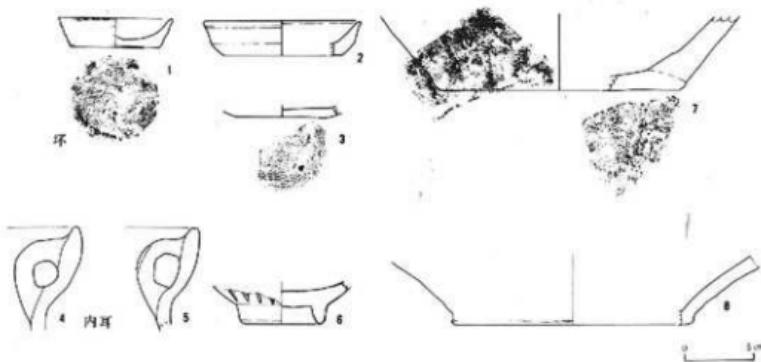
(2) 瓢 (第8図8)

大甕と思われ、推定底径17.2cmを測る。成形はヨリコづくりにより、底部は砂底である。胎土に透明・白色・赤色・黒色粒子、白色小石を含み、暗赤褐色を呈する。D-2区出土。

4 石臼 (第8図9、10)

つき白：推定口径32.3cm、器高16.7cm、推定底径25.2cm、重量8.4kg。覆土中より出土。

ひき白：直径31.1cm、器高12.8cm、重量13.5kg。D-1グリッドより出土。



第8図 遺物

第4章 総括

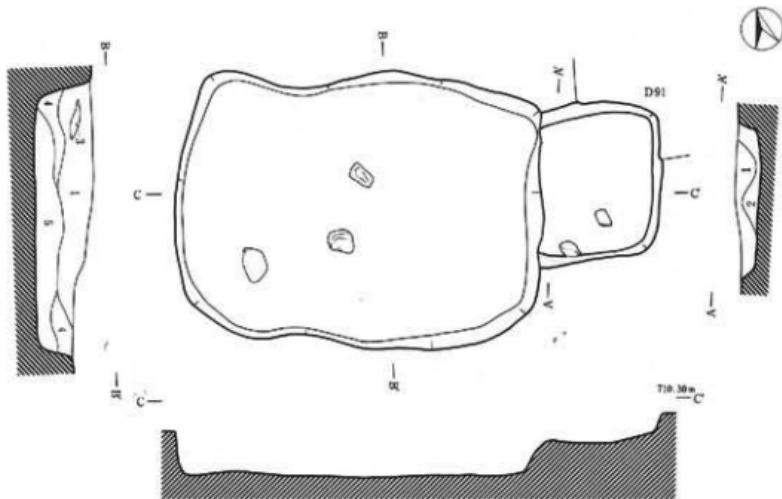
今回の調査は前回の第5曲輪（五郎兵衛用水跡地）遺構確認調査に引き続き、主郭下第2曲輪の遺構確認調査を行った。この曲輪は第一次調査の際トレンチ内に柱穴及び溝を検出していたが、今回の調査でその全貌を掴もうとした。調査は主郭下第2曲輪北側全面を対象とし、その面積は884平方メートルとなった。

遺構に関しては前述の通りであるが豎穴遺構は、昭和61年に発行された「大井城跡発掘報告書」（長野県佐久市教育委員会）にも同様と思われる豎穴遺構が報告されており興味深い。豎穴遺構内の遺物は覆土中に数点出土しているが、時代を決定づけられる物の出土はなかった。

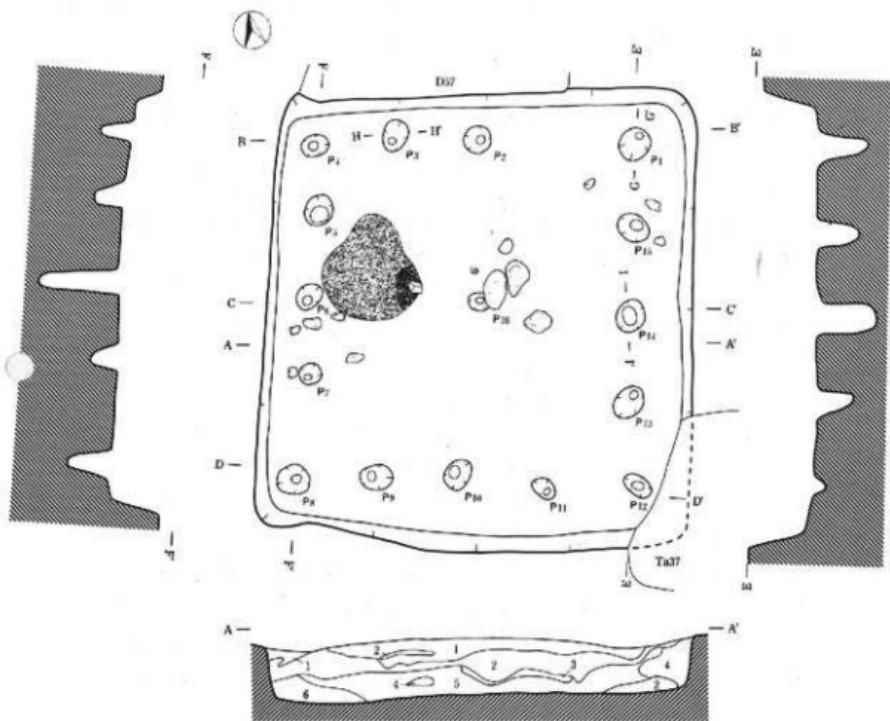
この豎穴遺構2基は前述にその違いを記しているが、第6図における豎穴遺構は床面直上に整（のみ）の使用痕が多数認められ、その建築（工事）の様子を考察することができる。

また鱗の使用痕は調査区域内の至る所に残されており、特に溝・柱穴に至っては同じ道具を使用していることがわかる。

ここで考察できるのは豎穴遺構の時期であるが、溝・柱穴も比較的同一時期に建築されたものと考えても良いようである。ただし豎穴遺構はどれほどの期間使用されていたかはわからないが、鑿跡の摩滅が全く無く、また床面に炭化物の検出も無く、何かを敷いた痕跡もないところから、



第9図 大井城跡（黒岩城跡）Ta 1号豎穴遺構（大井城跡調査報告書20P第8図より）

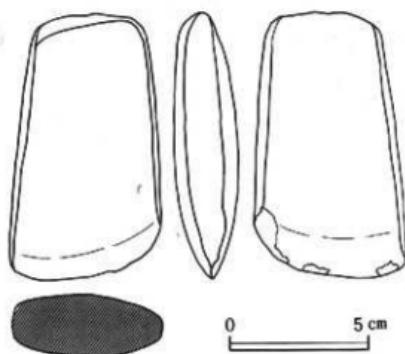


第10図 大井城跡(黒岩城跡) Ta39号竪穴遺構(大井城跡調査報告書54P第48図より)

短期間の使用にとどまっているように思える。

第5図の竪穴遺構は柱穴が重複しているので、第6図の竪穴遺構よりは長期間使用していたものと考える。ただし両竪穴遺構共に火気の使用は認められず、この城域内の生活の場所としては考えられない。

柱穴であるが、検出した柱穴は295を数えた。しかし建築遺構として成り立つものは確実には1軒分(竪穴遺構を除く)しか認めることができなかった。当初は数軒分のものと考えていたが、(断片的に数軒分あるか) 図面の通りであった。この第2曲輪北側は岩盤上に殆どの柱穴を設けており、



第11図 第2竪穴遺構出土

全調査期間中にわたり、詳しく調査したので見落としはなかったと確信する。柱穴の形状は全て隅丸方形であり、他に特長のある柱穴を見い出すことはなかった。また礎石となるような石の検出もなかった。

遺物は完形品が数点ありその全てが灯明皿と考えられる。遺物の出土状態は全て投棄されたものであり、建築遺構に関連するものはなかった。面白いものは第6図の竪穴遺構覆土中から出土された縄文時代後期と思われる磨製石斧（第11図）である。縄文時代と思われる遺物は第2次調査でも数点出土していたが、遺構の検出はなかった。これは前回の報告書でも述べているが、この城郭は曲輪面積を広げるため、かなり大規模な土木工事をしており、そのため縄文時代の遺構は空中に飛んでしまったと思われる。

したがって縄文時代の遺構の出現は今後ともないと思われる。ただ切り盛り部分を深く下げればその一部の遺構確認は可能かもしれない。

溝に関しては今回の調査でも特筆できることはなかった。第1次調査時にトレント内を幅約20センチメートルの溝が2本横切っていた。今回の調査ではこの溝の行方を追うことも目的のひとつであった。しかし実測図で見るとおり、まったく規格性がなく、その性格を追うことは困難な状態であった。今後の課題としてこの溝を追求する方法としては、東側がどのような形状を有していくのかを今後の発掘によって経過を待つしかない。

今までの発掘調査からこの城郭を推測すると、城内からは生活遺物が全く無く、また井戸も1本も検出しない状況から（ただし井戸は籠城の際、水の手として大変重要なもののため必ず城域内の何処かにあると考えるが）、中世特有の根小屋式城郭の公算が大である。根小屋式城郭とは、普段は城郭の麓などの住居（屋敷）で生活しており、いざ戦いというときに城に籠る型式の城で、城郭内ではほとんど生活をしていない。今回出現した柱穴などの遺構も、おそらく城郭に伴う倉庫群ではなかったかと考える。今後の調査では城郭に伴う住居跡などの周辺調査をしてみたい。

また遺物の出土状態からは、この城郭は一度も戦乱にあうことなく、平和なうちに廃城になつたようである。廃城になったとき、武器・生活用品などは別のところに移されたのであろう。



調査前



調査風景



安全祈願祭



埋めもどし前

図版 2



第5図 第1竪穴遺構



第4図 第2竪穴遺構



柱穴及び第1(奥) 第2(手前) 竪穴造構



柱穴検出状況

図版 4



第1壁穴遺構



第1壁穴遺構



A-4 グリッド断面



東西方向に構築された溝



第2竪穴遺構



第2竪穴遺構内の鑿使用痕

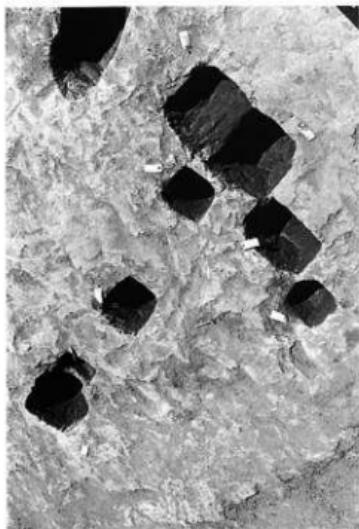
図版 6



内耳土器出土状況（第2竪穴造構内）



柱穴内の整使用痕



柱穴 (重複状況)



柱穴



柱穴 (重複状況)



常滑片 (8図-7)

常滑片 (8図-6)

図版 8



坏



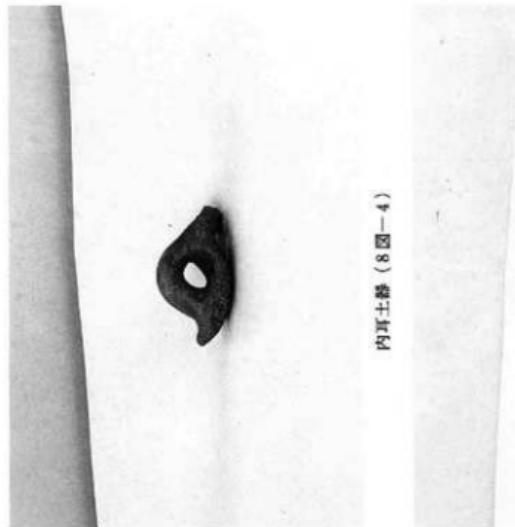
磨製石斧（第11図）



坏



坏



内耳土器（8図-4）



内耳土器破片（8図-5）



ひき目（8図-9）



つき目（8図-10）

浅科村文化財調査報告書

第1集 「土合1号墳の調査」（1969年）

第2集 「矢鳴城跡」緊急発掘調査報告書（1985年）

第3集 「五郎兵衛用水」矢鳴城跡腰曲輪部に開鑿した用水路の調査（1987年）

第4集 「矢鳴城跡」第2曲輪部の建築遺構（1988年）

浅科村文化財調査報告 第4集

矢 鳴 城 跡

——第2曲輪部の建築遺構——

発行 1988年3月20日

発行者 浅科村教育委員会

印刷 ほおづき書籍株式会社
